

# 技が輝く

## およそ三百年前に遡る起源

奈良団扇は、奈良時代の中頃、春日社の神官が軍扇の形になぞらえて作ったのが始まりと言われます。当初は骨太なものに紙を張った洪団扇しゅうだんせんであったようです。中世にかけて透かし彫りなどの改良が加えられ、次第に洗練されていきました。江戸時代には「上品で美しい」と贈り物に喜ばれ、六月の土用の入りには奈良奉行が幕府に献上するならわしになっていました。奈良団扇は、奈良

天平模様の透かし入りの奈良団扇



晒さらしや刀剣・墨などと並んで奈良の特産として名声を博しました。丹念な手作業が紡ぎ出す造形美

団扇づくりは、まず和紙の染めから始まります。次に型写しの作業。十本分二十枚の紙を重ねて四隅を綴じ合わせ、上に図案を切り抜いた型紙を置き、墨を付けた刷毛で模様を和紙に写します。次に透かし彫りの作業。和紙の束を朴ぼくの木の台の上に置き、細かい小刀で模様を突き彫ります。模

様の優雅さとは裏腹にかなりの力仕事です。貼りの作業は、肝心要

## 奈良県

# 奈良団扇



「貼り」の作業。三人の分担で手際よく貼り合わせる。貼り上がった団扇は天井近くに張った紐の上のせ、一昼夜乾燥させる。

の仕事。たたき貼りと呼ばれる手法で糊を付け、骨を等間隔に並べてから、二枚の紙の模様がずれないように細心の注意を払い、貼り合わせます。高級品となると二百本の骨を均一に広げなければならず、熟練を要する作業です。その後、乾燥・念はぎ（骨が浮き出るように筋を立てる）・手元貼り（扇面と柄の継ぎ目部分に模様紙を貼る）の作業を行い、裁断・ふち取りという、全体を美し

く仕上げる作業を経て完成です。受け継がれる伝統の技

時代が移り、奈良団扇は一時、技術が絶えかけていましたが、明治の初めに池田栄三郎氏が透かし彫り用の器具を発見し、その技法が復興されました。現在、この技法を継承する製造元は池田含香堂がこうどうだけで、四代目の池田繁氏のご一家が昔ながらの伝統的な手法で団扇作りを続けています。平成七年に県指定伝統的工芸品に指定された奈良団扇は、暑中の実用品・風流な趣の漂う奈良みやげとして、今なお喜ばれています。



「透かし彫り」の作業。鹿、五重塔などの模様を小刀で突き彫りする。

## 池田含香堂

お問い合わせ

TEL 〇七四二一一二二一三六九〇

奈良県商工労働部商業振興課

TEL 〇七四二一一二七一五四二四